

なされ」

「一寸旦那はん、見て御覽真白いのが居ます、真白いのは、次の世に人間に生れて来る、人間に近いと云ひます。旦那はん、小さい犬は唐犬より日本犬の方が可愛いおますなア、芋虫見たいに丸々と太つてます、此方のは斑や、此犬斑と云ひまんね、一番下になつてるのは、爪の先まで眞黒や、此犬無垢犬と云ふて、大きいなつたら強いのだすぜ、此犬私にお呉んなアレ」

「コレ何を云ふね、私は今迄に犬などを育てた事が無いので、如何したら宜いのか一向に勝手が判らん」

「それでしたら、私が御當家さんへ御奉公に参ります迄に、家のお父あんが犬を飼ふて居ましたので宜う知つてます、私が育て、遣ります」

「ア、さうか、裏になんぞ空箱が有るじやろふ中へ藁を敷いて入れて遣りなされ」

「へエ、まだ目が開いてまへんさかいに御飯は能う食べまへん、お粥を焚いて食べさせます」

「オ、中々手間の掛るものぢやな、按排して遣つとくれ」

犬は猫と違ひまして、三日飼ひますと、飼ひ主の恩を知るとか申します。ものゝ三十日も過ちますと、主人や丁稚に可愛がつて貰ひますので寔に宜う懐いて居ります。後から尾を振つて付いて歩きます。可愛いもので、或日表から、四十格好の上品な人が、

「エ、御免やす」

「ハイ、おいでなされ」

「一寸御尋ね致しますが、アノ表に居ります犬は、彼れは御當家様の犬でござりますか」

「ハイ、私の方のかと尋ねられますと、マア、今分の處では私處の犬ぢやが、畜生の事ぢやに依つて、何か粗相でもしましたかな」

「イ、エさうではござりません、エ、御當家の犬なら調度幸ひで、アノ三疋居ります中で一疋頂き度い犬がござりますので、一寸お願ひに出ましたのでござりますが、如何でござります、御無體が願へませんでしょうか」

「ハイ、犬を貰ひにお出でなされたのか、イヤ商賣人の家に犬が仰山居ますと繁雑うてどむならん、何れなと好きなのを持つてお歸り」

「ハイ、彼の中の黒が頂きとうござります」

「ア、左様か、誰の眼も同じぢや、私宅の丁稚も彼犬を一番可愛がつて居りますのぢやが、御所望とあれば何も縁のものぢや、連れてお歸り、差上げます」

「有難う存じます。早速の御承知でござりますが、今日は私の一存で願ひ申したので、宅へ歸りまして主人と話を致しましたら定めし主人も嬉ぶ事でござります、何れ日を改めて、吉日を選んで頂